

2025/11/30「救い主の約束」イザヤ9:1-7

交読文・詩編98：1-3 さ103 セ129 (77)

今年もいよいよアドベントを迎えました。佐々木先生のドイツ土産の「ヘルンフートの星」が、夜道を歩く人々を照らしています。わたしたちすべての人の心に、主の光が届けられることを祈ります。

闇に覆われた世界

太陽系の惑星たちは、みな太陽の影響を受けています。地球は何億年も前から、この恩恵にあずかっています。作物が実り、漁ができるのは、日光のおかげです。人間の体は、朝日を浴びるだけで、幸せを感じるようにできています。この膨大なエネルギーが、これからも放出され続けるということは、驚くべきことではないでしょうか。私たちはその体験を、精神状態や社会の様子にもあてはめることがよくあります。「晴々とした気分」とか「明るい社会」など自然に使います。

そして同時に「人生まっくら」や「暗黒世界」といった、逆の時にも、やはり使います。それは、人生の半分に「夜」を体験しているからです。月が照らし、星が光る美しさはあっても、人間にとって、夜の闇というものは、恐ろしいもの、危険や不安を感じるものでしょう。だからこそ電気が発明され、道路や家屋では、夜でも明るいことが私たちを安心させます。

ユダヤの人々は、イザヤの預言を聞いていた時、世界が真っ暗だと沈んでいました。「地を見渡せば、見よ、苦難と闇、暗黒と苦悩、暗闇と追放…」(8：22)と記されているからです。彼らにとって、真昼の世界は、何百年も昔のダビデ王、ソロモン王の時代の栄光だったでしょう。あるいは、出エジプトのモーセや、カナン之地へ導いたアブラハムといった、優れたリーダーのいた時代かもしれません。しかし、王国は分裂し、国民は墮落し、隣国は侵略して、滅亡の一途を辿っていました。ゼブルン之地、ナフタリ之地、異邦人のガリラヤとは、国土の北側で、真っ先に侵略されていった地域でした。

京都復興教会は、ホーリネス教会の弾圧を経験しています。牧師は検挙され、集会はできなくなり、辛酸を舐めました。戦争は、まさに闇が支配する世界でした。教会すら呑み込む、夜の時代でした。誰のせいかと問い続けても、答えの出ない、悩みと苦しみが続くだけです。

死の陰の地を照らす光

数年前に「天国なんてどこにもないよ」という本が話題になりました。パンデミックのコロナ病棟でチャプレンをした人の著書でした。そして、小さな副題は「それでもキリストと生きる」でした。イザヤの預言は、イエス様の4つの名前を掲げています。「驚くべき指導者」「力ある神」「永遠の父」「平和の君」どれをとっても、そんな方は見出されないではないか、という世界の中で、この約束は、それでも信仰に生きる人々には現実となって、存在しています。牧師が亡くなり、会堂も失った教会が、祈りによって復興し、新会堂が与えられ19年、地域に愛されて80年を迎えました。

おひさまが照らす真昼にも、実は満天の星空が瞬いています。でも、そんなことを気に留めることは誰もいません。何もかもがあたりまえだと思っているとき、神様の愛も救いも、「そうなんだ」という単なる観念的なものでしかなくなります。しかし、闇が濃いほど、その星空の輝きに、人は圧倒され、「こんな美しい景色は見たことがない」と感激すら覚えるのです。イエス様が生まれた時の「ベツレヘムの星」は、世界でただ一度だけ輝いた星で、人間の限りある知識で解明することはできないでしょう。死の匂いが立ち込める場所で、大いなる光が輝いたということは、それを信じた人にしかわからない、素晴らしい奇跡なのです。

なぜ、世界に昼と夜があるのか、善と悪が存在するのか、生まれるだけでなく死があるのは、なぜなのか。その問いに答えはありません。しかし、素晴らしい奇跡の答えが聖書にはあります。それは、闇の中にも光は輝いているということです。それも、その救いを信じる人には、驚くべき、力ある、永遠の、平和であるイエス様という、大いなる光を見ることができるといふ答えなのです。